

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02497

研究課題名(和文) 現代アフリカ系アメリカ女性作家によるネラ・ラーセンの抵抗の言語行為の継承と変奏

研究課題名(英文) Contemporary African-American Women Writers' Inheritance of Nella Larsen's Speech Act of Resistance

研究代表者

鶴殿 悦子 (Udono, Etsuko)

愛知県立大学・外国語学部・名誉教授

研究者番号：00128638

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、2015年までの科研費研究で明らかになった成果を基礎とし、ハーレム・ルネサンスと呼ばれる1920-30年代のアフリカ系アメリカ人による文化運動において産出された文学テキストと、現代アフリカ系アメリカ文学テキストとの影響関係について分析することである。まず「ハーレム・ルネサンス」の見直しと再定義を行なった。その上で、その時代の黒人女性作家を一括りに捉えることをやめ、当時もっとも優れた文学テキストを残した作家の一人であるネラ・ラーセンの文学テキストを中心に検証を進めた。ラーセンによる文学的実践がいかに今日のアフリカ系アメリカ文学において変奏され継承されているかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、ハーレム・ルネサンスと呼ばれるアフリカ系アメリカ人による最初の文化運動についての見直しと再定義を行なった。従来の批評においては、ハーレム・ルネサンスの時期がジャズ・エイジと重なる1920年代と考えられおり、経済的繁栄と文学的隆盛とが混同されていた。ハーレム・ルネサンスをアフリカ系アメリカ人の文学・文化が非常に高度なレベルで産みだされた時期として捉え直した。同時に、それまで一括りにされることの多かった当時の黒人女性作家について、政治的観点からでなく、文学的価値の観点から再検証を行なった。もちろん、作家の文学的価値はその政治的立ち位置と不可分の関係にあることは当然の前提である。

研究成果の概要(英文)： This research aims to examine the interface between the literature of African Americans in the 1920s-30s and at present on the basis of the results of my 2013-2015 Kaken research. First, the present research revised the existing definition of the Harlem Renaissance, the cultural movement by African Americans in the 1920s-30s. Second, it focused on Nella Larsen, one of the most successful writers at that time, and examined how her literary styles and techniques, themes, and/or motifs had been modified and inherited by contemporary African-American women writers.

研究分野：人文学

キーワード：アフリカ系アメリカ文学 ネラ・ラーセン ハーレム・ルネサンス インターテクスチュアリティ 人種

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 2009~2012年度の科研費研究「トニ・モリスン文学テキストにおけるおとぎ話深層構造の分析」において、トニ・モリスンの文学テキストを分析し、その深層構造を解明することができた。この研究を通して、モリスンが過去の文学の物語の枠組みをいかに換骨奪胎しつつ引用しているかを知り、次の研究課題へと繋げることができた。2013~2015年度の科研費研究「1920年代アフリカ系アメリカ女性作家による抵抗の言語行為とその継承」では、1920年代ハーレム・ルネサンス期のアフリカ系アメリカ女性文学と現代アフリカ系アメリカ女性文学とのインターフェイスを探った。研究対象として、ハーレム・ルネサンス期を代表すると言われてきた女性作家、Jessie Redmon Fauset, Zora Neale Hurston, Nella Larsenらを取り上げるつもりであったが、文献を読み込む過程で、従来のように彼女たちを一括りにして論じることができないという認識に至った。芸術的な観点から作家たちの優劣を見極めることが必要である。アフリカ系アメリカ文学研究では政治的・思想的側面が大きく評価され、詳細なテキスト分析が十分になされずにきていると痛感した。

(2) このことから、ハーレム・ルネサンスとはどのような文化運動であったかを総合的に見直さなければ、当時の作家たちの執筆状況や文学的価値を把握し判断することはできないと考えるに至った。本研究を始めるにあたって、昨年度までの研究の仕切り直しをせざるを得なくなった。本研究においては、まずハーレム・ルネサンスを再定義することから始めた。折しもオバマ政権誕生前後から、黒人文化・文学に関する優れた研究が現れるようになっていた。『サーヴェイ・グラフィック』『ファイア!!』等ハーレム・ルネサンス当時の黒人雑誌の復刻も多く出版され、この時代に関する新しい視点からの優れた研究書が合衆国において出版され始めた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、2015年までの科研費研究で明らかになった成果を基礎とし、ハーレム・ルネサンスと呼ばれる1920-30年代のアフリカ系アメリカ人による文化運動において産出された文学テキストと、現代アフリカ系アメリカ文学テキストとの類似性と影響関係について分析することである。とりわけ、ネラ・ラーセンによる文学的实践が、いかに今日のアフリカ系アメリカ文学において変奏され継承されているかを検証することに努める。

(2) 前年度までの研究により、最初のアフリカ系アメリカ文学の勃興期であるハーレム・ルネサンスの文学全体のレヴィジョンをする必要があることが判明した。また、黒人女性作家全体として一括りにするのではなく、この時代もっとも優れた文学テキストを残した作家の一人であるネラ・ラーセンに焦点を絞り、考察と検証を押し進めることとした。「ハーレム・ルネサンス期の黒人女性作家」という括り方は、その時代の文学を正確に評価する上でふさわしくない。

(3) ラーセン文学の特異性と優位性については、前年度からの研究で検証してきた。そのことを十全に証明するためには、作家をとりまくその時代の文学環境を見定める必要がある。そのため、ハーレム・ルネサンスとはどのような運動もしくは現象であったかを検証し直し、再定義することに努める。

3. 研究の方法

(1) 文献の読み込み

2016年度、2017年度にかけて、1920-30年度に産出されたアフリカ系アメリカ女性作家の文学テキストの再読を行なった。ラーセン、フォーセット、ハーストンを中心に精読・再読を行なった。特に、ラーセンとハーストンに関しては、伝記・自伝を集中的に読み、文学作品をとりまく状況の把握を深化させた。また、Bontemps, Huggins, Lewis, Hatchingson, Wallらによる、ハーレム・ルネサンスについての代表的研究書を数多く読んだ。

(2) 研究発表・シンポジウム・講演等

2016年度から毎年必ず研究発表・講演もしくはシンポジウムを行うようにした。聴衆との間で直接質疑応答を行うことのできる口頭発表は、研究にとってたいへん有益である。その成果を現在進行中の研究にフィードバックすることができる。また、口頭発表は研究の長い行程の一里塚として機能し、どこまで研究が進んだかを指し示してくれる。健康上の問題、コロナ禍の問題が重なり、計画していた海外での研究発表を行うことができなかったが、国内では、4年間で研究発表2回、シンポジウム(企画・進行を含む)1回、講演7回、一般講座2回を行った。毎年口頭発表することは、研究を着実に進めるためのブースターとして機能した。

(3) 研究論文・共著書の執筆・出版

上記研究発表等の原稿を基盤にし、2016年度以降研究論文もしくは共著書を毎年出版した。2016年度は、2冊の共著書『新たなるトニ・モリスン』『天秤と林檎』を出版した。2017年度は、1冊の共著書『法と生から見るアメリカ文学』を出版した。2018年度には、論文『私は黒

人ではない』——『あの夕陽』における子殺し』を公表した。2019年度には、論文「『スーラ』における暴力と同性愛」、共著書『エスニシティと物語り』を出版した。この他、提出済みの論文「ハーレム・ルネサンスとネラ・ラーセン」があり、2020年度内に共著書『ハーレム・ルネサンス』として出版される予定である。これらはいずれ一冊の単著書にまとめる予定である。

上記の論文執筆と同時進行する形で、合衆国にて出版予定の英文著書出版に向けて、研究論文の英訳を鋭意進めている。

(4) 現地調査

2015年度までの研究でニューヨーク市を2度訪れ、文献調査を行い、ハーレム・ルネサンスの舞台であったニューヨーク市ハーレム地区の実地調査を行なった。2017年度から2018年度にかけて、ハーレム地区、ワシントンDCを訪ね、実地調査・文献調査を行う予定であったが、病のためかなわず、2019年度にはコロナ禍のために渡米することができなかった。そのため渡米のための予算は返還した。この計画は2020年度からの科研費研究へと持ち越されることとなった。

4. 研究成果

(1) 2016年4月、黒人研究学会例会において研究発表；同年6月、日本アメリカ文学会中部支部例会において研究発表；同年10月、筑波大学アメリカ文学会例会において講演。これらはいずれも、トニ・モリスン文学とその前の時代のアフリカ系アメリカ文学との関連に力点を置いて発表した。2017年6月、愛知県立大学公開講座において、アフリカ系アメリカ文学について講義；同年12月、多民族研究学会第29回全国大会において「ネラ・ラーセン文学の軌跡」と題して講演した。2018年1月、京都大学講演会において講演；同年9月、あいち国文の会例会において講演；同年11月津田塾大学アメリカ文学研究会において講演。これらはいずれも、モリスン文学とその前の時代のアフリカ系アメリカ文学との関連に力点を置いて講演した。2019年4月、日本アメリカ文学会中部支部第36回大会において「ハーレム・ルネサンスとは何か」と題するシンポジウムを企画し、司会・講師を務めた。同年10月、日本英文学会中国四国支部において「ハーレム・ルネサンスとネラ・ラーセン」と題する講演を行なった。同年11月、名古屋市男女平等参画推進センターにおいて、アメリカ映画におけるアフリカ系アメリカ女性表象について講義した。同年12月、日本アメリカ文学会北海道支部29回大会において「ハーレム・ルネサンスの徴の下に」と題する講演を行ない、同時にシンポジウムのコメンテーターも務めた。

(2) 執筆した研究論文の中で、本研究の成果がもっとも反映されているのが、共著書『エスニシティと物語り』(2019)に所収されている論文「ネラ・ラーセンの伝記」と、2020年出版予定の『ハーレム・ルネサンス』に所収されている論文「ネラ・ラーセンとハーレム・ルネサンス」である。「ネラ・ラーセンの伝記」では、作家ラーセンの、ハーレム・ルネサンス当時から今日に至るまでの文学的位置づけについて分析した。これまでに書かれたラーセンの伝記の多くは誤解と曲解に満ちており、作家とその文学の実像を正確に伝えていない。これらの伝記により、インターレイシャルな主体を決して評価しようとしないう合衆国の人種イデオロギーが、当時から今日にまで続いていることが示されている。作家を取り巻く数々の誤解曲解を正すことが必要であり、同時に文学テキストの価値を正當に評価することが必要である。例えば、「ハーレム・ルネサンスの助産婦」と呼ばれ、尊敬されている女性作家フォーセットの残した文学テキストが、本当に優れたものであるかどうかの検証が十分には行われていないことを指摘した。

その他の作家たちについても同様であり、この大規模な仕事はまだほとんど手付かずの状態である。黒人作家たちの政治的立場・業績が主たる評価の対象となり、その文学テキストの芸術的価値が十分に吟味されていないのである。しかし、当然一人で全部の作家について検証することは不可能なので、本研究では、特に当時の女性作家の文学テキストについて、特にラーセンを中心に考察を行った。加えて、2020年度からの科研費研究では、さらに分析を深化させるつもりである。批評家ハッチンソンは、ラーセン文学は「カラー・ラインの非人間性とそれが課す精神的重圧に対して、アメリカ文学において書かれたもっとも激しい抗議の一つである」と言っている。こうしたラーセンの政治的主張の側面を評価することは重要だが、そのことと共に、彼女の文学テキストの特徴を検証することがぜひとも必要である。彼女の文学テキストはその政治性と密接に関係しているのである。本研究の4年間においてラーセンのテキストを精読する作業はほぼ成し終え、ラーセン文学がハーレム・ルネサンス期を代表する優れたテキストであることの確信はすでに持っている。次はそれをどのように説得するかというアウトプットの作業が残されている。

(3) もう一つの研究テーマである、ハーレム・ルネサンス研究は、本研究期間の後半において集中して行なった。研究書を読破する中で明確になったことは、ハーレム・ルネサンスの時期が従来言われてきた1920年代ではなく、第一次世界大戦後から1930年代半ばまでという長い期間にわたるという事実の発見である。その認識のためには、ハーレム・ルネサンスを、経済活動中心の視点から文学活動中心の視点へと変換することが必要である。当たり前のことのようにあ

るが、これまでそのように考えられて来なかった。ハーレム・ルネサンスという文学・文化の運動を経済活動や政治活動と混同して論じられてきたのである。このことについて検証し直し、特に前述の二つの論文において、部分的ながらも主張を公にすることができた。この検証のために特に助けになったのは、ハギンズ(1971)、ルイス(1979, 1994)、ハッチンソン(1995, 2007)による著作であり、また、近年数多く出版されるようになったアフリカ系アメリカ文学に関する出版物——ハーレム・ルネサンス期の小説集、当時の雑誌の復刻等——である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鷗殿えりか（悦子）	4. 巻 21
2. 論文標題 「私は黒人ではない」－「あの夕陽」における子殺し	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フォークナー	6. 最初と最後の頁 4-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷗殿えりか（悦子）	4. 巻 51-17
2. 論文標題 『スーラ』における暴力と同性愛	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 84-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 8件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鷗殿えりか（悦子）
2. 発表標題 シンポジウム「ハーレム・ルネサンスとは何か」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会中部支部（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鷗殿えりか（悦子）
2. 発表標題 講演「ハーレム・ルネサンスとネラ・ラーセン」
3. 学会等名 日本英文学会中国四国支部（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鶴殿えりか(悦子)
2. 発表標題 講演「ハーレム・ルネサンスの徴の下に」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会北海道支部(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鶴殿えりか(悦子)
2. 発表標題 トニ・モリスンの小説の物語構造
3. 学会等名 あいち国文の会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴殿えりか(悦子)
2. 発表標題 トニ・モリスンの小説の物語構造
3. 学会等名 津田塾大学アメリカ文学研究会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴殿えりか(悦子)
2. 発表標題 トニ・モリスンの小説の物語構造
3. 学会等名 京都大学講演会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴殿えりか(悦子)
2. 発表標題 ネラ・ラーセン文学の軌跡
3. 学会等名 多民族研究学会第29回全国大会講演(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鶴殿えりか(悦子)
2. 発表標題 トニ・モリスンの小説の物語構造
3. 学会等名 黒人研究学会例会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鶴殿えりか(悦子)
2. 発表標題 トニ・モリスンの『ホーム』における兄妹の闘争
3. 学会等名 日本アメリカ文学会中部支部例会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鶴殿えりか(悦子)
2. 発表標題 トニ・モリスンの小説
3. 学会等名 筑波大学アメリカ文学会例会(招待講演)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 鶴殿えりか(悦子)、松本昇、馬場聡、西垣内磨留美、風呂本惇子、峯真依子、深瀬由佳、寺嶋さなえ、ハーン小路恭子、白川恵子、君塚淳一、田中千晶、伊達雅彦、程文清、山本伸、小林朋子、齋藤博次、新関芳生、川村亜樹、梶原克教、平尾吉直、清水菜穂、他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 414(186-199)
3. 書名 エスニシティと物語りー複眼的文学論	
1. 著者名 鶴殿えりか(悦子)、越川芳明、鷺津浩子、杉浦悦子、岩元巖、山口善成、幡山秀明、大畠一芳、三添篤郎、新井哲男、植野達郎、千葉洋平、坂口佳代子、大工原ちなみ、齋藤博次、長岡真吾、余田真也、平沼公子、永瀬美智子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 悠書館	5. 総ページ数 346 (45-61)
3. 書名 天秤と林檎ーアメリカ文学の法と生	
1. 著者名 鶴殿えりか(悦子)、森あおい、松本昇、風呂本惇子、宮本敬子、山野茂、戸田由紀子、西本あづさ、時里祐子、小林朋子、浅井千晶、深瀬由希子、程文清、ハーン小路恭子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 250 (i-viii, 195-217)
3. 書名 新たなるトニ・モリスナーその小説世界を拓く	
1. 著者名 鶴殿えりか(悦子)、岩元巖、越川芳明、杉浦悦子、鷺津浩子、山口善成、幡山秀明、大畠一芳、三添篤郎、新井哲男、植野達郎、千葉洋平、坂口佳代子、大工原ちなみ、齋藤博次、長岡真吾、余田真也、平沼公子、永瀬美智子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 悠書館	5. 総ページ数 346 (45-61)
3. 書名 法と生から見るアメリカ文学	

1. 著者名 鶴殿えりか(悦子)、小泉泉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 104
3. 書名 どっちの勝ち? (翻訳)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----